阿賀野市が目指す外国語教育
～令和８年度　阿賀野市英語科プロジェクトより～

１　阿賀野市英語科プロジェクトの目的

阿賀野市では，「ふるさとを愛し，未来を切り拓いていく人を育てる教育」を基本理念としている。そのための「基本方針Ⅰ　個性や能力を伸ばす教育の推進」の目標として，「グローバル化・ＩＣＴ化に対応した教育の推進」を掲げている。

現代の社会では，今までに経験したことのない予測不能な課題と出会うことが多い。これらの課題は，世界中の人々と協力していかなければ解決できないものばかりである。グローバル化に対応し，世界の人々と協力しながらいろいろな課題を解決して未来を切り拓いていくためには，英語力の向上とコミュニケーション力の育成が必要不可欠である。

児童生徒の英語力の向上，世界の人々とコミュニケーションを図ることができる資質・能力の育成を目的として，阿賀野市英語科プロジェクトを実施する。

２　令和８年度　阿賀野市英語科プロジェクトの目標

児童生徒の英語に対する意欲の向上と，英語によるコミュニケーション力の育成

すべての児童生徒にとって「分かる・できる・使える・うれしい」英語の授業

すべての児童生徒が意欲的に取り組む英語の授業を目指している。このような授業を積み重ねることにより，児童生徒のコミュニケーション能力が高まる。

児童生徒の中には，英語の授業が「よく分からない」「できない」と英語の授業への意欲低下につながってしまう。この課題を解決するために，英語科プロジェクトでは，授業における「授業のねらい」の到達度を的確に把握し一人でも多くの児童生徒が到達できるように支援策を講じていく。

すべての児童生徒にとって「わかる・できる」授業を実践していくことにより，英語によるコミュニケーション力が向上するとともに，児童生徒の英語への意欲も高まる。

３　目標達成のための取組

【小中共通の取組　１】

授業改善　「学習課題」「まとめ」のある授業

魅力ある Goal・見通し
→児童生徒の意欲

（授業の前に）
何のために学習するのかを明確にする
↓
その学習をすると，どんなことができるようになるか（　どんなよいことがあるか　）
英語であれば，
英語を使って，どんなコミュニケーションが図れるようになるか（　＝Goal　）

学習課題のある授業

児童生徒の課題意識を高め，問題解決的な学習過程にする。　cf.教師の説明をひたすら聞いて暗記する授業

こうなりたいのだが，できない。どうしたらよいか？　＝学習課題

知っていることを総動員して，できなかったことをできるようにする。　＝課題の解決

授業に「まとめ」は必要

何を学んだのかを整理する。＝学びの自覚

次に使える形でまとめる。後からノートを見返して，課題の解決に使える形でまとめる。

【小中共通の取組　２】

暗記からの脱却　「学び方」の定着へ

英語はひたすら暗記するというイメージがある。暗記することも大切であるが，ひたすらの暗記だけでよいのだろうか。暗記が苦手な児童生徒は拒否反応をおこす。また，暗記したものも，意味のつながりがなければ活用につながらない。暗記しても，使わなければ，忘れられてしまう。教師から与えられたものを暗記する学習方法では，ついてこれない児童生徒が必ず出てくる。「英語はつまらない。英語は嫌だ。」につながってしまう。

今まで　暗記して回答する学習 ↓ これから　あるものや調べたことを活用する学習

「話すこと」「書くこと」であれば，

・相手に伝えたいことを考える。決める。
・伝える具体的な内容や順番を考える。
・必要な単語や表現を考える。教科書・辞書・タブレット等を使って調べる。
（できる限り既習事項を活用する。教科書のヒント Idea Box はできる限り活用する。）

この学習方法は，小学校でも同じ形式をとっている。自分が伝えたいことを考え，必要な単語や表現を集めて発信していく。暗記していなくても，調べて発信していく。中学校でも同じ形式である。「学び方」として定着させていく必要がある。既習事項をどのように活用すればよいか，単語や表現をどうやって調べたらよいかということを身に付けさせたい。

暗記しなくてもよいと述べているように誤解されるかもしれないが，英語を使った活動をどれだけたくさん行うかということが重要である。何度も繰り返し使うことによって自然と覚えるようにしたい。そのためには，英語を使う必然性，英語を使いたくなる状況を設定しなければならない。家庭学習ともリンクさせ，何度も英語を使う仕掛けが必要である。経験の数が少なければ，英語の力はつかない。

【小中共通の取組　３】

ＡＬＴの活用方法の転換　個別の支援への積極的な活用

【小学校においては】

小学校においては，ＡＬＴの活用時間が年々増えてきている。活用時間が増えていることはよいのだが活用の仕方の質を向上させることに課題がある。

・ＡＬＴにすべてお任せの授業　×　あくまでも学級担任（教科担当）か主となる。
・ＡＬＴの専門性を生かす。
・授業者とＡＬＴが一緒に協力して児童の個別支援を行う。

【中学校においては】

今までとは方針を変更して，配置日におけるすべての英語の授業にＡＬＴから出てもらうようにする。生徒の個別支援を目的として，２人で英語の指導にあたるイメージで行う。英語の授業におけるＡＬＴの活用というと，授業の計画を立て，ＡＬＴにしてもらうことを考え，打ち合わせを行うという形式であった。「特別な場面の活用及び入念な打ち合わせ」というイメージであった。これからは，基本的には「個別の支援」という考え方で，特別な役割をお願いしたいときにプラスするという方式にしていく。年度当初にＡＬＴと個別の支援について打ち合わせを行い，その方針のもとにできるだけ多くの時間に授業に入ってもらう。

（個別支援の例）
・speaking のペア活動の demonstration
・speaking において，生徒とペアで会話をする。
・writing において，なかなか書けない生徒への支援をする。　等
・writing の授業中の添削

【小学校の取組】

１　外国語・外国語活動訪問研修

教育センター指導主事が各校の外国語・外国語活動の授業を参観し，放課後に外国語。外国語活動を指導する教員を対象にミニ研修を行う。

２　英語の宿題（通年）

英語にふれることを目的とした英語の宿題を実施する。外国語。外国語活動の授業があった日に宿題を出す。３～６年生を対象に令和７年度と同じ内容の宿題に取り組む。以前に配付したものを印刷して利用する，または，次の場所にデータがあるので，そこから印刷して利用する。

３　市内共通児童配付 Can-Do リストの活用（通年）

教育センターで作成した児童配付用 Can-Do リストを学期の最初に児童に配付し，学習内容を確認するとともに，学習の様子を評価していく。保護者にも見てもらい，共通理解を図る。データの場所は，小学校英語の宿題と同じ。

【中学校の取組】

１　学校を単位とした，Reading または Writing の授業研究
～すべての生徒が分かる・できる（書ける or 読める）協働で取り組む授業研究～

・各校の英語科教員全員で研修をする。
　「すべての生徒が書ける or 読めるようにするには，どうしたらよいか」
・英語科教員が協働で指導案を作成する。
　同じ学年の授業研究をするのであれば，同じ指導案で行う。
・英語の授業研究は英語科教員全員で参観し，英語科教員全員で協議会を行う。
・評価の視点　どれだけの生徒がねらいとして設定した
　　英文を書く　or　英文の概要をとらえる　が達成できたかで評価する。
・支援策について検討し，有効であったか評価する。

２　まなチャレ教材（阿賀野市版）の活用

阿賀野市の生徒に合わせた「まなチャレ教材（阿賀野市版）」を市教委で作成し，各校に配信する。内容を英語が教育全員で確認するとともに，全校体制で確実に活用する。家庭学習と授業を組み合わせ，授業時数に大きく影響しないように配慮する。

３　家庭学習の考案と実践

今までの家庭学習に加え，自主学習ではない「宿題」の形式の家庭学習を考え，継続的に実施することにより英語にふれる機会を確実に増やす。

例えば…
・英語科プロジェクトで取り組む Reading または Writing の授業と関連させた宿題
・授業を振り返り，大切なポイントを自分の言葉でまとめる宿題
・まなチャレ教材（阿賀野市版）を使い，ヒントを手掛かりに自力で「書くこと」「読むこと」に挑戦する宿題